たちんぽ
～去勢娼婦の店～

日本一変態が多いと言われる埼玉県、某市。
この街の片隅に週末だけ営業している
変わった風俗店があるという。
その店にいるのは全て去勢手術を受けた風俗嬢……
すなわち男である。

そして自称変態である『俺』は
好奇心でその店に行ってみる事にした。

その店は普通の雑居ビルの地下1階にあった。
外から通じる階段を降りてゆき、一見するとバーの入り口にも
間違えそうな、いかがわしさの無い入口だった。
俺が店の入り口まで降りてくると、受付の店員に
声を掛けられた。

店員『いらっしゃいませ。お客様は本日は初めてのご来店ですね』

俺『あ、はい』

店員『それでは当店の簡単なご説明をさせていただきます。
当店にいる子は全て去勢した男性です』

俺『(うん、知ってる)』

店員『元は男性の体でしたが、心はほぼ女性ですので……、
『彼女』達には女性として接していただければ幸いです。
……かといって、完全な女性とも少し違います。
ユニセックスな、天使のような存在です。当店では
『去勢嬢』と呼んでいます』

俺『はあ……』

店員『それともう一つ、時折知らずに来店される
お客様がいらっしゃいますが、当店の風俗嬢達の
『去勢』の状態は、男性機能を無くしただけの
状態がほとんどです』

俺「え？」
店員「平たく言うと、『玉だけ無い』という事です。
彼女らは『おちんちんのある女の子』と解釈していただければ
分かりやすいです」
俺「あー……」
たしかに、俺もニューハーフの店みたいな感覚で
やって来ていた。
――週末だけやっていて秘密クラブみたいな感じだけど、
案外普通だな。
料金表を見ると……結構値段が高い。
これは、もしかして失敗したか……。

店員に案内され、俺は去勢嬢達のいる部屋に通された。
灰色のガラス越しに『彼女』達が見える。

店員「こちらのガラスはマジックミラーになっていますので、
指名したい子をじっくりと選んでいただいて結構です」

まるで幼稚園か遊園地のような、子供じみたデザインの部屋に
彼女達はいた。
完全に女の子にしか見えない子もいれば、男とも女ともつかない
微妙な子もいる。
マジックミラー越しに見える彼女らの、
こちらの目を意識していない、お喋りの声が少しだけ聞こえる。
皆、他愛の無い会話をしているようだ。
俺はじっくりと観察する

ふと、一人の子に目が留まった。
ジュースを飲んでいたその子は俺に気付くように飲むのをやめ、
こちらを向いた。
マジックミラーを透視してるかのように俺の目を
じっと見る。
そしてニコリとする。

――かわいいな。彼女にするか。
俺「じゃあ、あの子を」
店員「かしこまりました」

店員が彼女を連れてくる。
女(?)の子「はじめまして。僕、ルイっていいまーす。
指名してくれてありがとう！　とっても嬉しいよ！」
キャラ作りなのか素なのか分からんが、
ルイは子供みたいな喋り方だ。
本当に男なのかと疑いたくなるほど女の子っぽい
華奢(きゃしゃ)な体つきだ。
歳はいくつなんだろう？
……一応『女の子』なんだから
歳は聞かないのがマナーってもんだな。
俺「うん、はじめまして」
ルイ「じゃあ行こう！」

ルイに個室に案内される。
俺は今日はまだ風呂に入ってなかったので、
軽くシャワーを浴びてさっぱりしてからベッドにのった。

俺がシャワーから出てくるのを待っていたルイが
持っていたお茶のペットボトルを置きベッドにのっかってきた。
近づいて、俺に笑顔を見せたかと思ったら反対を向き
スイっと尻を俺の顔の前に出した。

そしてスカートをまくり上げる。
ルイ「では、どーぞ♪」

――アナルの所にぽっかりと穴が開いている。
穴から2センチほど下に目をやると、
本来はあるべき膨らみが無い。
玉無し……。
その下、小さなおちんちんがポロリとぶら下がっている。
俺「(本当に男だ……)」

しかし、そのおちんちんは普通の男の物と比べると小さい。
女性ホルモンを使っている人のようだ。
ルイ「どうしたの？　お店の人に説明してもらったでしょ？」
ルイが無邪気に俺を見て話しかける。
小さなおちんちんが喋るのに合わせてプルプルしている。
俺「あ、ああ……」

とりあえず、俺はルイの尻を堪能する事にした。
誰も得をしない情報だが、僕はケツ穴いじりが好きです。
ニチュ
ビクッ
チロリン

ルイ「ん……」
ルイがビクリと反応する。
部屋の備え付けのローションを手に付けて
ルイのアナルにズブズブと指を出し入れしてほぐす。
ニチュ
ルイ「ううん……」
気持ち良さそうにしているルイ。
ビクッ
チロリン

アナルがだいぶほぐれてきた。
使い慣れているであろうこの穴はすぐに柔らかくなった。
時折俺の指を咥えるようにキュっと締まる。
ルイは感じているようで、彼女のおちんちんがピクピクしている。
アナルを広げると、何か良い香りがする。
客に不快な思いをさせないように事前に腸内を洗浄してる上に何か香水のような物を仕込んでいるようだ。
変態である俺としてはこのままスカトロになっても全然かまわないのだが……。
ニチュッ
ニチュ

ルイ「ん……、ねえ……」
俺「ん？」
ルイ「指をさ……、根元まで入れて……、
おちんちんの方を……探ってみてよ……」
言われた通り、指を根元まで入れて探ってみると、
コリコリした感触がある。
俺「これは……、前立腺だな？」
ルイ「うん、そうだよ。やっぱりここが一番気持ちいい……。
ごめんね、僕が気持ちよくさせなくちゃいけないのに」
——いえ、これでも結構です。
股間以外は女の子に見える彼女の
反応を一瞬かわいいと思ってしまった。
ニチュ
ニチュッ

彼女の反応を見て気分を高めている俺は、ちょっとした意地悪心が出てきたので彼女の前立腺を更にコリコリする。
ルイ「あっ、そんなにっ……！」
ルイは前立腺を強く刺激されて尻をモジモジさせる。次第に前立腺が固くなり同時に彼女のおちんちんが勃起してわずかに膨らむ。
ルイ「……あ、だめ、このままじゃ、イっちゃう……」
俺「お？」
それを聞いて俺はコリコリをやめた。
ルイ「何でやめちゃうの？」
おあずけをされたルイが切なそうに尋ねる。

そりゃあ、お客さんは俺だからな。
俺の23センチのデカチンも
そろそろ気持ちよくなりたいのさ……。
二チュッ
二チュ
そうして俺は勃起した自分のチンポをルイに見せる。
俺「こいつを見てどう思う？」
ルイ「すごく……大きいです……」
でかいのはいいからさ、このままじゃ
治まりがつかねぇんだよ。

ほぐしきったルイのアナルに俺のチンポが入る。
ルイ「あん♪」
ズッ
念入りにほぐしたのでチンポがスムーズに入ってゆく。
アナルの入り口のヒダと俺のチンポがプリプリと擦れる。
それに応えるようにルイのおちんちんがヒクつく。
ルイ「ああ……」
そして俺は腰を振る。